

# 知求会ニュース

2011年12月

第40号

## ◎ 9月入試合格結果

国際社会研究専攻 一般 0名・社会人 1名・外国人2名 計3名

国際文化研究専攻 一般 0名・社会人 1名・外国人5名 計6名

国際交流研究専攻 一般 3名・社会人 0名・外国人 5名・

国際交流・国際貢献活動経験者 0名 計8名 合計17名

## ◎ 宇都宮大学 HANDS プロジェクト 外国につながる子どもフォーラム 2011 開催

2011年12月3日(土)に、大学会館2階多目的ホールにて、午後1時から田巻松雄先生の開会挨拶がありました。午後1時15分からの第一部では、学生実行員会による創作劇を上演、その後実行員会と来場者との意見交換が行われました。午後2時30分からの第二部「教員・支援者にとって有効な手引き書について考える」では、佐藤和之(真岡市立真岡西小学校 教諭・多文化公共圏センター研究員)さんの司会により、制作者若林秀樹先生の解説後、加藤佳代(神奈川県立地球市民かながわプラザ・あーすぷらざ外国人教育相談コーディネーター)さん・相田孝(栃木市立南小学校 教諭)さん・石塚倫子(栃木市立栃木中央小学校 教諭)さんらのパネルディスカッションが開催されました。午後3時40分からの第三部「進学ガイダンスのあり方について考える」では、田巻松雄先生の司会により、大関健二(真岡市立真岡西小学校 校長)さん・田中正浩(真岡市教育委員会 指導主事)さん・原田真理子(佐野市日本語教室指導助手・多文化公共圏センター研究員)さん・渡邊恭子(栃木県立鹿沼東高等学校 教諭)さん・上原秀一(教育学部准教授)先生らのパネルディスカッションが開催されました。

## \* 『HANDS next—とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ

2007年9月20日に、ニュースレター『HANDS』第1号が発行されました。2010年度より宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』がリニューアルされ、『HANDS next』として再出発することになりました。

### 第6号(2011年9月9日)

「平成23年度 第1回外国人児童生徒・グローバル教育推進協議会報告」

国際学部教授 HANDS プロジェクト 研究代表 田巻松雄

「「続・進め、日本語教室！」～外国人児童生徒支援会議 2年目のスタート～」

国際学部 特任准教授 若林秀樹

「ボランティア交流フリートーク報告」

教育学部スクールサポートセンター コーディネーター 辻 猛司

「2011年度子ども国際理解サマースクール～「多文化共生」教育実践～」

大学院国際学研究科博士後期課程

国際学部附属多文化公共圏センター研究員 坂本文子

「両国に生きる子供達と過ごして」

国際学部 国際社会学科 4年 稲井田恵未

事務局便り

・HANDS プロジェクトからのお知らせ

「多言語による高校進学ガイダンス」

4月から現在までの活動

12月までの予定

**第7号**(2011年11月21日)

「第2回外国人児童生徒・グローバル教育推進協議会」開催

国際学部教授 HANDS プロジェクト 研究代表 田巻松雄

多様化する外国につながる子どもへの効果的な支援について考える

～第2回「外国人児童生徒支援会議」報告～

国際学部 特任准教授 若林秀樹

「多言語による高校進学ガイダンス」開催報告

国際学部教授 HANDS プロジェクト 研究代表 田巻松雄

「多言語による高校進学ガイダンス」に参加して

栃木県立鹿沼東高等学校 英語国際理解部 川嶋沙妃・金子真理

シリーズ；学生ボランティア派遣体験記4

待ち遠しいボランティア活動

教育学部 特別支援教育2年 戸井田真弓

コミュニケーションを大切に

国際学部 国際社会学科3年 海野杉江

学生ボランティアを受け入れて

栃木市立南小学校 教務主任 川俣真理子

事務局便り

・HANDS プロジェクトからのお知らせ

「外国につながる子どもフォーラム2011」の開催

## ◎ 平成23年度 第1回 各学部等同窓会連絡協議会報告

2011(平成23)年11月8日(火)午後4時から、コミュニティフロア(UUプラザ2階)にて、平成23年度第1回 各学部等同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は進村武男 学長・馬場敬信 理事・渡邊直樹 理事・石田朋靖 理事・國友孝信 理事の大学側5名と事務局担当者5名、吉葉恭行 国際学部同窓会会長・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・小林春雄 教育学部同窓会会長・柴田毅 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・清水由行工学部同窓会副会長・上澤和彦工学部同窓会副会長・和賀井睦夫 農学部同窓会会長・笠原義人 同

副会長・津谷好人農学部同窓会理事長の同窓会側 10 名でした。議事内容は、検討事項として、1. 各学部同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。

#### ◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞 朝刊 (平成 23 年 8 月 20 日発行) 4 面に、「外国人生徒 どう進路指導」と題して、「宇大 研究会が支援会議」の内容でハンズプロジェクト代表・**田巻松雄**先生の記事が掲載されました。

2. 下野新聞 朝刊 (平成 23 年 9 月 20 日発行) 2 面に、「県内外国人留学生 「日本で長く働きたい」と題して、「就職希望が過半数」の内容で医療器具メーカーのマニーに就職された**崔 仁勲**さん(国際文化研究専攻・10 期生)の記事が掲載されました。

3. UU now26 号 (平成 23 年 11 月 20 日発行) 4・5 面に、「特集 宇都宮大学 HANDS プロジェクト」で、「内なる国際化」に向き合う」の内容で**田巻松雄**先生をはじめとするメンバー、**重田康博**先生・**若林秀樹**先生・**スエヨシ アナ**先生・**船山千恵**さん・**坂本文子**さん(国際社会研究専攻・5 期生)らが紹介されました。

<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/uunow-pdf/uu26/4-5.pdf>

4. 下野新聞 朝刊 (平成 23 年 12 月 4 日発行) 3 面に、「言葉の壁や偏見超えよう」と題して、「外国人の児童生徒教育」「創作劇通じ支援策論議」の内容で宇大 HANDS プロジェクトの記事が掲載されました。

#### ◎ 国際学部だより

1. 朝日新聞 朝刊 (平成 23 年 5 月 12 日発行) 28 面に、「とちぎ学生なう」コーナーで、「インドで学べ国際協力」の内容で国際学部 3 年生**岩崎芽衣**さんの原稿が掲載されました。

2. 毎日新聞 朝刊 (平成 23 年 6 月 17 日発行) 25 面に、「途上国の学校給食支援 TFT、宇大でスタート」と題して、「学生ら、食堂に導入」の内容で学生サークル「TFT 宇都宮」代表・国際学部 2 年の**竹元志穂**さんらの記事が掲載されました。

3. 下野新聞 朝刊 (平成 23 年 6 月 21 日発行) 3 面に、「避難の妊産婦手助け」と題して、「学生企画 交流の場に」「宇大で 24 日「ママ茶会」」の内容で国際学部 4 年生**須田千温**さんの記事が掲載されました。

4. UU now26 号 (平成 23 年 11 月 20 日発行) 13 面に、「Circle TFT 宇都宮」と題して、「先進国の飽食と途上国の飢餓を同時に解決」の内容で**竹元志穂**さんらが紹介されました。

<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/uunow-pdf/uu26/12-13.pdf>

5. UU now26 号 (平成 23 年 11 月 20 日発行) 14 面に、「宇大生は今！」のコーナーで、「震災ボランティアに参加して」の内容で国際学部生らのコメントが紹介されました。

<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/uunow-pdf/uu26/14.pdf>

6. 平成 23 年 11 月 19 日午後 3 時より、宇都宮大学国際学部 A 棟 3 階共同研究室にて、国際学部同窓会第 6 回定期総会が開催されました。詳細については、国際学部同窓会 HP へアクセスして下さい。<http://www.afis.jp>

## ◎ お知らせ

栃木県立美術館で開催される巡回展・浅川巧生誕 120 年記念「浅川伯教・巧兄弟の心と眼—朝鮮時代の美」の関連企画・講演会に、卒業生・修了生であり、かつ当同窓会(知求会)副会長の李 尚珍さん(山梨英和大学助教)(国際文化学科・国際文化研究専攻・第 1 期生)が、平成 24 年 2 月 26 日(日)午後 2 時から同美術館集会室にて、「浅川兄弟と朝鮮・韓国」(仮題)で講演されます。ぜひ、多くの同窓生の参集をお願い致します。

**研究室訪問 32** 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 32 回には国際社会交流研究講座所属の若林秀樹先生にお願いしました。

### 「外国につながる子どもの教育現場で求められるもの」

(『教員必携 外国につながる子どもの教育 Q&A・翻訳資料』をめぐって)

若林 秀樹

平成 23 年 4 月、宇都宮大学・文部科学省特別経費プロジェクト「グローバル化社会に対応する人材養成と地域貢献」(以下通称 HANDS) から『教員必携 外国につながる子どもの教育 Q&A・翻訳資料』が刊行された。その執筆と編集に関わった立場から、外国につながる子どもの支援現場でいま何が要求されているのかを、背景や課題を踏まえて検証してみたい。

「外国人児童生徒」という言葉が「外国につながる子ども」に変わって来た理由は、日本育ちだが支援が必要な子どもや、日本国籍だが日本語を話さないなど、子どもたちが多様化してきたからだ。また、現場での支援も、学校への適応指導や日本語指導などから、日本語を習得した後の授業支援や教科指導、進路指導、多国籍化する保護者対応など、その領域が拡大している。

リーマンショック後の失業問題や東日本大震災の影響などで、外国人の数が減少しているが、減少という言葉の報道によって、外国人に関する諸問題も減少すると思われたら間違いであり、それは教育現場にも当てはまる。複雑化する教育環境の中で多様化する外国につながる子どもや保護者を抱え、指導に関わる教員は自努力で切り抜けているのが現状だ。

今年 8 月に発表された「公立学校(小・中・高・その他中等教育学校・特別支援学校)に在籍する日本語指導が必要な児童生徒数」(文部科学省、平成 22 年 9 月調査、以下要指導児童生徒)では、全国で 28,511 名の児童生徒が要指導であると報告されている。しかし、誰がどのような基準で日本語指導の必要性を判断しているかも疑問だ。現在の学校現場では、子どもの日本語能力を判定する方法や基準は存在しないからだ。とすれば、数字は学校教員が在籍児童生徒の中で“日本語指導が必要だろう”と思われる子どもを報告した数字の集計結果に過ぎない。

実際、日本語による支援は思ったより長い期間必要である。生活のための日本語が習得できても授業の内容を理解するためには不十分であり、続けて学習言語習得のための支援が必要となる。自分の考えを述べる力や入試に適応する作文の力もつけなければならない。やがては敬語の使い分けや行間を読む力も必要となる。このように子ども本位で視点を拡大すれば、要指導児童生徒に関する集計結果はもっと大きくなるだろう。

現在、外国につながる子どもに対する最低限の指導事項や具体的な指導方法を定めたものはない。教員対象の研修会を実施したり指導手引きや翻訳文集などを作成している自治体もあるが、内容にも認識の違いが見られる。また、地域によって教員が得られる情報に差があることも問題だ。

先に挙げた要指導児童生徒数からも興味深い事実が分かる。栃木県内小中学校における要指導児童生徒数は 639 名であり、その在籍校は 134 校にわたる。県教委は現在 40 の小中学校（小学校 29 校、中学校 11 校）を外国人児童生徒教育拠点校（以下拠点校）に指定し、加配として担当教員を配置している。仮に 40 拠点校の担当教員が研修や情報を得られたとしても、残る 94 校（以下非拠点校）はどう考えれば良いだろう。これら非拠点校の学級担任を始めとする教員は、情報を得たり研修をする時間も無いまま子どもと向き合っていることになる。この構図は、外国人児童生徒教育に関して先進的であるとされる他県を含めて、全国的に大差はない。

拠点校に外国人児童生徒担当として配置された教員に目を向けてみる。HANDS は平成 22 年度、「外国人児童生徒支援会議」を立ち上げた。これは県内の拠点校 40 校の担当教員の研修や情報交換の場として、年 3 回開催している。HANDS の調べでは、本年度（H23）40 の拠点校で担当教員として指導に当たっている教員数は 54 名だった。そして 54 名の外国人児童生徒教育に関わった経験年数を集計すると、70%に当たる 37 名が 3 年未満であり 35%に当たる 19 名が経験 1 年目の教員だ。この割合はここ 5 年ほど変わりがなく、これは担当教員が研修を積んで指導力を身につけたいと思っても志半ばで担当から外れてしまうことを表している。また、担当教員が短期間で変わることは、学校内や地域において外国人児童生徒教育の分野が軽視されかねない要因にもなっている。

以上の背景や課題を踏まえると、現場でまず必要な資料は、学級担任であれ担当教員であれ、外国につながる子どもと接する教員が何をすればよいのかを明確に示した「入り口の書」という判断の下、『教員必携 外国につながる子どもの教育 Q&A・翻訳資料』は作成された。「手引き書」として扱いやすくするために、「即効性」「分かりやすさ」「敷居の低さ」という 3 つのポイントを設定した。詳しい内容は文字数の都合でここに紹介することは出来ないが、利用者を初心者に特化し提案する内容も最小限に絞りながら、使いやすさに徹底するという作成意図は、十分に反映された物になったと思う。完成後、栃木県内の全小中学校に 1 冊ずつ配布したほか、HANDS のサイト「だいじょうぶ net.」を通して配布希望を受け付け、これまで全国的に 100 件近い要望に応えている。配布後一定期

間において利用者に対するアンケートを行っているが、これまで述べたような作成意図も十分理解され活用されていることが分かった。現場の多忙な教員・支援者にとって、良き応援書となり得ることを希望する。本書を希望の場合「だいじょうぶ net」<http://djb.utsunomiya-u.ac.jp/>の「問い合わせコーナー」を参照されたい。

現在 HANDS は、本書の続編に当たる『教員必携 外国につながる子どもの教育 実践例・進路指導』（仮題）の作成に取りかかっている。先の『～Q&A・翻訳資料』で外国につながる子どもの教育への入り口が提案できたと仮定すれば、次は効果的な支援例を提供するのが当然の役目と考えている。冒頭に述べたような、近年多様化してきた外国につながる子どもに対する効果的な支援例を、子どものケースごとに具体的に提案したいと考えている。また、年々定住化が進む外国人の現状を踏まえ、多言語による高校進学ガイダンスの必要性が認識されている今、進路指導のあり方についても具体的な情報を提供したい。ここで言う進路指導とは、従来中学校後半に受けた「どれくらいの成績ならこの高校に入れるか」という指導ではない。外国につながる子ども一人ひとりが日本の学校で学び始めた時から、すべての教育活動は子どもの豊かな将来を形成するための大切な要素であると捉え、時に国と国の間を移動しながら成長する子どもたちにとって、学ぶべき大切なものは何かを教員・支援者一人ひとりが自問しながら取り組む必要があると思っている。

学校現場全体に目を向けたとき、外国につながる子どもたちと一緒に学ぶ日本人の子どもたちにとっても、学校はグローバル人材を育成するための生の現場となりつつある。それは彼らに関わる大人たちにとっても同じことであり、やがては社会全体がグローバル人材を育成するフィールドとなる必要がある。今回の文章で何度も使用した“支援”という言葉は、言い換えれば自分で立ち上がりたくても立ち上がれない者に対して提供する力であり、支援が存在する現状そのものが同時に、“違い”を認識することが出来ない社会構造を表しているだろう。国籍や言語習慣に関係なく、誰もが相手の“違い”を自然に認め合い共にスタートラインに立てる社会構造が出来てこそ、本当の多文化共生が語れる社会になるのだろう。いま、外国につながる子どもの教育について考えることは、日本や日本人が真のグローバル化を目指す意味で欠かすことの出来ない大切な要素となっている。

(2011年12月9日原稿受理)

**博士録 14** 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 14 回目には方小賛さんをお願いしました。

### 「皆様に感謝の言葉」

方小賛

挨拶が大変遅れた佐々木一隆研究室出身の方小賛です。就職活動や体調のため、なかなか早めに投稿できず、ご挨拶が遅れましたことをお詫びいたします。今中国の杭州市から皆様に近況報告をいたします。おかげ様でこの秋から浙江財経学院に就職が決まり、これ

から新米の日本語教員として頑張っていきますので、どうかいろいろご指導をお願いいたします。

就職現場に立っている今日、振り返ってみるとやはり博士号を取ってよかったと思います。今の中国では大学の教師になるには博士号を取るのが必須条件になりつつあるので、将来中国の大学で活躍したい方には博士号を取ることをお勧めします。

修了して半年あまりになりました。宇大での研究生生活はまだ昨日の出来事のように鮮明でした。遠い中国から訪日し、宇大の優しい先生方に恵まれて幸せだったと思います。そして、今帰国して先生方が周りにいないことが非常に寂しく感じています。特に、親分感覚（実の親より若いですけど、笑…）の佐々木一隆先生がもうそばで励ましてくださることなく、これから研究者としての道を一人で歩まなきゃいけないことが怖くなってきました。

佐々木先生には私の博論を指導し、博士後期課程の苦しみをたっぷり味わせてしまったことを申しわけなく思いました。私の知る限り、佐々木先生は一番熱心で責任感の強い先生です。論文指導だけでなく、精神面のフォローもちゃんとしてくださったからこそ、私は今までの人生で一番暗い一年（後期課程4年目）を乗り越えて無事に論文を提出できるようになりました。今も忘れられないことがあります。論文提出期限の半月前のある日の早朝、中村真先生の資料室で泣きながら、佐々木先生にあと半年ぐらい論文提出を延期してもいいかというメールを書いていた。当時、論文は書き終えないとか、修正する問題点がいっぱい残るとか、もう絶望の頂点に達していました。それを受けて、先生は早早くから研究室に来て、「私は絶対諦めない」と言って私をいろいろ自信づけてくださいました。博士後期課程は本当に孤独、ストレス、無力、自己否定の長い時期でした。先生がそばにいなかったら、この私は絶対修了できなかったと思います。だから、この場を借りて佐々木先生に感謝の気持ちを少しでも言い表させていただきたいのです。

中村真先生にも感謝、感謝です。先生は論文の執筆や学術雑誌への論文投稿において、いろいろとご指導をいただきました。そして、資料室を自由に使わせていただいたこともとても感謝しております。先生の顔を見ると気持ちが落ち着くようになり、博論執筆で傷だらけの心が慰められるような感じがしました。先生の日頃からの優しさに恵まれてよかったと思います。吉田一彦先生と松金公正先生と丁貴連先生にも丁寧に論文のご指導・ご指摘を賜りましたことを深く感謝いたします。また、授業や研究会を通して吉田ゼミの皆様からいろいろなお助言をいただいたことにも感謝いたします。丁先生から「いつか博士後期課程はいい経験だったと思う時期が来る」という言葉をいただき、今は後期課程での研究経験がよかったとしみじみ感じております。

また、姉分の同期の宮本玲子さんは私を大きく支えてくれたことを感謝します。同期の坂本文子さんとお互いに支えながら頑張ってきたことを一生忘れられません。そして、後輩の蔡佳樹さん、サソチアさんなど無事に博士号を取れるように願い、後輩の皆様の奮闘を待ち望んでいます。

最後に、日本にいらっしゃる先生方と宇大に在学している皆様、および海外にいらっし

やる同窓会の皆様のご幸福とご健康を祈っております。

### 博士論文の要旨：

博士後期課程では、「日本語と中国語における身体語彙慣用句の比較研究—認知言語学の視点から見た『頭部』表現を中心に—」をテーマに博士論文をまとめました。

この論文は意味研究の重要性と学習現場の要求から、「頭」「顔」「目」「耳」「口」「鼻」「首」という「頭部」に関わる身体語彙とそれに関連する「心」と「気」を含んだ慣用句について比較研究を行うものです。本論文の目的は、認知言語学の視点から、特にメタファーとメトニミーのプロセスに着目して、日本語と中国語における「頭」「顔」「目」「耳」「口」「鼻」「首」「心」「気」及びその慣用句の意味拡張の異同を明らかにするとともに、当該慣用句の発生のメカニズムも詳述することです。この目的を達成するために、メタファーとメトニミーという方法を用いて、身体語彙の意味拡張およびその慣用句を分類・分析し、両言語の慣用句の類似点と相違点を明らかにすることを試みました。さらに、その慣用句の発生のメカニズムを追究しました。

考察を通して、本論文の成果を列挙すると次のようになります。

- (1) 日本語と中国語において、頭部身体語彙「頭」「顔」「目」「耳」「口」「鼻」「首」のそれぞれが、基本義から派生義へと意味拡張して多義となっている点を、メタファーとメトニミーを用いて筆者が独自に明示化し、辞書記載項目のあり方に示唆を与えたこと。
- (2) こうした基本義と派生義の体系的な関係付けを踏まえて、両言語の慣用句発生のメカニズムの解明を試みたこと。すなわち、慣用句を構成要素である身体部位の意味が慣用句に関与する仕方によって、身体語彙の基本義に基づくもの（すなわち身体部位としての意味がそのまま慣用句に生きる場合）と身体語彙の派生義に関わるもの（すなわち身体語彙自体に意味拡張が起こる場合）に分けて、構成要素の意味の観点から慣用句をある程度体系的にまとめたこと。
- (3) 「心」と「気」についても、主にメタファーを用いて、本来抽象的なものをいったん具体化して捉えることにより、両言語の慣用句成立のメカニズムの解明を試みたこと。
- (4) メタファーによる拡張、メトニミーによる拡張、メタファーとメトニミーの両方による拡張という3つのタイプを用いて、身体語彙慣用句発生のメカニズムの詳述を試み、語彙項目および言語ごとに、さらに身体語彙の基本義に基づくものと派生義に関わるものの特徴をメタファーとメトニミーの働きを通して微細に検証したこと。例えば、悲しみや失望などを表す「首を垂れる」という日本語の慣用句では、Lakoff & Kövecses (1987) が提示した「特定の感情が及ぼす生理的影響はその感情を表す」という一般的なメトニミーの原理に基づいて、人間が悲しみや失望などで自然に首を垂れるという姿勢を取るような身体的経験からその成立の理由を説明できたと考えられます。
- (5) 認知のカテゴリーに属する文化的経験からも、日本語と中国語の慣用句の相違の原因をある程度説明できたこと。例えば、日本語では「首を切る」のように、「首」を使って

「解雇」の意味を表すのに対して、中国語の「首」の慣用句は「解雇」に關与しにくいことを社会的・文化的な経験基盤の違いに基づいてある程度説明できたことが挙げられます。

- (6) 以上を通して、従来の先行研究とは異なり、本論文では独自の観点から日本語と中国語の身体語彙慣用句の比較を行い、言語研究の理論と記述の両面において一定の貢献をしたこと。
- (7) 日本語と中国語の身体語彙慣用句を認知言語学の立場から比較することを通して、日本語の身体語彙とその慣用句の全体像を把握できるようになり、日本語教育にも一定の貢献の可能性を示唆したこと。

(2011年10月21日原稿受理)

**知究人 19** 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第40号の第19回目は、広島大学大学院に進学されている田巻研究室 OG の和栗佳代さんと一橋大学大学院に進学されている内山研究室 OB の菅野智博さんをお願いしました。

### 「所属研究科のご紹介」

広島大学大学院国際協力研究科 教育文化専攻教育開発コース  
博士課程前期1年 和栗 佳代

現在、私は広島大学大学院国際協力研究科に所属しています。ここで、少し国際協力研究科のご紹介をさせて頂きたいと思います。広島大学国際協力研究科 (International Development and Cooperation: IDEC) は、開発途上国の課題に取り組む人材を育成するために1994年4月に創設され、研究の柱としては、国際環境協力、国際教育協力、国際平和協力の3つを掲げています。当研究科では、アジア・アフリカを中心に積極的に留学生の受け入れを行っており、現在では全在学者の70%が留学生という状況です。また、実践型学習に力を注いでいることも当研究科の特徴であるといえます。その一例として、「グローバルインターンシッププログラム (通称 G.ecbo プログラム)」があります。これは、大学院生を国外の大学・機関に派遣するプログラムであり、私自身もこのプログラムを利用し、来年2月に Bangladesh のグラミン銀行にインターンとして約2カ月間滞在する予定です。

私の当研究科に対する印象としては、留学生や青年海外協力隊 OB・OG の方など、様々な背景をもつ学生がいるということと、将来国際協力機関で働きたいという高い志を持っている学生が多いということです。また、研究科側も私たちが目標に近づくためのプログラムを用意してくれています。私自身、他の学生から受ける刺激が多く、日々様々なことにチャレンジできる機会を与えてもらっており、このような環境に身を置けることは幸せなことだなと感じています。

次に、私の研究について少し紹介したいと思います。研究テーマは、バングラデシュにおける NGO によるノンフォーマル教育が女性の進路選択にどう貢献できるかということです。1990 年以降、バングラデシュの初等教育就学率は急激に向上し、女子の就学率は男子のそれを上回るほどになりました。これには、NGO におけるノンフォーマル初等教育プログラムが果たした役割が大きいと言われています。しかしながら、初等教育修了後の中等教育課程において、女子生徒の退学率が高いことが、現在のバングラデシュが抱える課題の一つであると言えます。その背景には、女性の早期結婚という習慣が依然として残っているということが挙げられます。そのような背景のもと、中等教育課程の女子学生は自分の進路についてどのような希望を持っているのかということインタビュー調査、質問票をもとに分析するとともに、NGO が彼女たちの進路選択にどのように貢献できるかということ NGO 関係者に対するインタビュー調査から考察していきたいと考えています。

海外での調査は今回が初めてであり、不安はありますが、精一杯がんばりたいと思います。末筆ではありますが、今回このような投稿の機会を与えて下さった知求会土屋さまに感謝するとともに、この原稿が宇都宮大学の学生の皆様に少しでもお役に立てることを願っています。

(国際学部 国際社会学科 2011 年 3 月卒業生)

(2011 年 12 月 10 日原稿受理)

## 「勉強を好きになったきっかけ、そして、今」

一橋大学社会学研究科 修士 1 年 菅野 智博

### 宇都宮大学時代

私は学部時代に東アジア社会史ゼミに所属し、指導教官の内山雅生先生に大変お世話になりました。本来、あまり勉強が好きではなかった私にとって、学部 3 年の前期に受講していた内山雅生先生、伊藤一彦先生、松金公正先生、佐々木史郎先生の演習はすべてのきっかけとなりました。発表の連続で大変ではありましたが、勉強ってこんなに楽しいものなのかと気づかされました。素敵なゼミのメンバーにも恵まれ、ゼミ時間内外での議論や自主的な勉強会、調査を兼ねた旅行（都内や台湾）などを通して常に周りのゼミ生と切磋琢磨してきました。内山先生には、卒論や留学だけではなく、普段の生活においても熱く指導して頂き、悩んでいる時は常に背中を押して下さいました。内山ゼミで学んだ 2 年間（留学を含めて 3 年間）は私の研究の原点であり、私の自信でもあります。

### 自分の研究テーマ

私は中国東北地方の農村社会の構造について研究しています。周知の通り、1932 年中国東北地方に日本の傀儡政権である「満洲国」が成立し、終戦まで約 14 年間存在していました。その「国家」の実情を知り、政治を安定させ、開発計画を作成するためには、何よりもまず人口の 8 割以上が住む農村を知る必要がありました。そのため、政権が存続した 14 年

間南満洲鉄道株式会社調査部や「満洲国」政府など諸機関によって様々な農村調査を行われ、莫大な調査資料が残されています。もちろん、これらの調査には植民地支配という部分も強く反映されていますが、当時の農村社会を知る上で唯一の手掛かりであり、貴重な資料です。これらの資料を通して、「満洲国」期の農村社会の構造について考察することは、日本支配下の「満洲国」の実態と限界の一端を明らかにすることができると考えています。

また、近年、中国の農村社会に関する研究が盛んに行われています。しかし、その多くは中国の華北地方や江南地方に関する成果であり、東北地方の農村社会に関する研究はまだ十分になされていません。「満洲国」期に限らず、共産党政権下の東北地方の農村社会の構造が土地改革、集団化、文化大革命、改革開放などを経てどのように変化したのか、その連続性と非連続性について研究していく必要があります。このことは、中国農村研究、中国近現代史研究に新たな視点を加えることができると考えています。そのためには、史料や文献資料に限らず、フィールドワークを積極的に活用し、史料から見えてこない農村社会の一面も明らかにしたいと考えています。

### 一橋大学社会学研究科

一橋大学社会学研究科は、総合社会科学専攻と地球社会研究専攻に分かれています。私が所属している総合社会科学専攻の中で更に社会動態研究や社会文化研究など6つの分野に分かれ、私は歴史社会研究分野の社会史アジアを専攻しています。社会学研究科では他の研究科での単位を認定していて、気軽に他の研究科の講義やゼミに参加することが可能であり、様々な分野の知識を得ることができます。私は自分の指導教官のゼミ（主ゼミ）以外に、朝鮮史と中国東北経済史のゼミにも参加していて（副ゼミ）、様々な研究発表を聞くことができ、更に私の研究について様々な視点からアドバイスを頂けるので、大変貴重な学びを得ています。

私にとって一橋大学の一番の魅力はやはり附属図書館や経済研究所資料室、社会科学統計情報研究センターに所蔵している資料の多さです。特に私が今研究している「満洲国」期の農村社会に関する日本側の調査資料が豊富に揃っています。附属図書館の雑誌棟ではほとんどの雑誌論文を入手することができ、豊富な中国語文献や中国の地方志も備えていて、研究する上で良い環境です。宇都宮大学と違って、附属図書館は基本的に9時～22時まで開館しているので、勉強したい学生にとって非常に便利です。

私が大学院を選ぶ上で、史料以外の決め手は指導教官でした。私は今、佐藤仁史先生の下で研究していて、佐藤先生は、中国農村、とりわけ江南地方の農村に関するフィールドワークにも力を注いでいます。私はこのようなフィールドワークの方法、そしてフィールドワークを活かした研究手法を学んでいきたいと考えています。

一橋大学は都心からも近いので、史料探しするのは非常に便利で、また他の大学のゼミや勉強会にも簡単にすることができます。大学院生が住むことのできる寮も完備して、非常に安く生活することができ、院生が研究する上で良い環境が揃っています。

学部時代から指導教官やゼミ生に恵まれ、院生になった今でも同じです。佐藤先生はいつもご丁寧に指導して下さり、忙しい時も私のために時間を作り、研究以外の部分でも大変お世話になっています。ゼミでも良い先輩や後輩と出会うことができ、非常によい環境で研究させて頂いています。今後、研究をしていく上で、数多くの高い壁が私の前に立ちただかることになると思います。大変困難な道ではあるが、覚悟を決めて一歩ずつ歩んでいきたいと思います。

(国際学部 国際文化学科 2011年3月卒業生)

(2011年12月4日原稿受理)

**海外だより 12** 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外在住者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。今回は、友松研究室OBの戸川正人さんをお願いしました。

### 「癒しの国ラオスから」

戸川 正人

私は、平成22年3月に国際学研究科博士後期課程を修了しました。平成22年2月から、独立行政法人国際協力機構（JICA）ラオス事務所長として、ラオスの首都ビエンチャンで勤務しています。私自身は、長らく援助機関で勤務し、ラオスは勤務を希望する一つの国でしたが、一般的にはラオスは日本にとってまだまだ遠い国だと思います。本日は、少しラオスの一般事情や私が考える援助の方向性などをお話したいと思います。

ラオスの人口は約630万人。国土は24万平方キロメートルで、8割が山岳地帯の内陸国です。北部の古都ルアン・パバンと南部のワット・プーという、アンコール・ワットと同じクメール王朝の遺跡群の世界遺産が二つあります。ラオスの最大の特徴は、雰囲気は日本に近く、ほっとして癒やされる点だと思います。それは、自己主張しない国民性で、人が優しく、静かで、控えめだからかも知れません。街中ではクラクションもほとんどなくて、街もとても静かです。それでいて、冠婚葬祭や送別会などのセレモニーになると、実に陽気に振る舞います。お酒を楽しく飲んで、夜中まで踊ったりする。よくいわれるのは、「ラオスの人は人生の楽しみ方をよく知っている」ということです。

ラオスは「宝箱の上に座っている」といわれます。「宝はあるのにふたを開けずにいる」という意味です。「インドシナ半島のバッテリー」といわれているとおり、水力発電の可能性は高いですが、開発レベルは10パーセント以下でしかありません。今後の開発が期待される場所です。また、ラオスは「インドシナのへそ」ともいわれています。内陸国としての強みを生かし、周辺国のタイ、カンボジア、ベトナム、ミャンマー、中国とを結ぶ道路が確保されれば、地理的な条件は良いのですが、人口が少なく、その人口も分散しているので、労働力が十分に確保できないことが課題です。首都ビエンチャンの人口ですら、約

70 万人。労働集約型の産業には限界があります。農業従事者が多いので、農閑期に人手があっても、農繁期になると田舎に帰ってしまうという話も多く聞きます。

個人的には、ラオスの主要なエネルギー源がクリーンな水力発電による電力であることを利用して、例えば都市交通に、より環境負荷の小さい電気自動車等を官民連携で導入して広めるなど、新しい発想も必要だと思っています。交通インフラが初期段階にある今、次世代を見据えたインフラを戦略的に整備することで、高い投資効果も期待されます。固定電話を経ずに、携帯電話を使い始めるのと同じ理屈です。日本は、開発した技術をラオスに輸出し、ラオスはその恩恵を受け入れ電気自動車の「ショールーム」となる。内陸国であるという地の利を活かすことができれば、近隣国にでも日本の先進技術を用いた電気自動車が広く認知される機会となります。日本のメーカーも進出できますし、地球全体の環境にも優しい事業なので、ラオスにとってもクリーンエネルギーの国というイメージを打ち出しやすくなります。

あと、これは援助関係者の中でもあまり知られてないのですが、ベトナム戦争では、ベトナムよりラオスのほうが多量に被弾しているのです。戦時中に約 2 億 7,000 万発のクラスター爆弾を被弾しており、人口一人当たりの爆弾の投下量が世界で一番多い国です。そして、その約三分の一が不発弾として残っている。これが開発の阻害要因となっています。これまで国際社会に対してうまくアピールしてこなかったため、カンボジアの地雷などと比較してまるで知られていません。2010 年 11 月に「クラスター弾に関する条約（オスロ条約）」の第 1 回締約国会議が、首都ビエンチャンで開かれ、ここで初めて国際社会に訴え、その存在が広く知られることになりました。

ラオスは、豊富な水源を利用した水力発電や鉱物資源などにより着実な経済発展を遂げていますが、国家目標である 2015 年までの MDGs（ミレニアム開発目標）の達成や、2020 年までの LDC（後発開発途上国）脱却に向け、解決すべき課題は山積しており、「人間の安全保障」や「貧困削減」という観点からも日本がラオスを支援する意義は大きいと考えています。2012 年は、「ラオス観光年」であり、11 月にはビエンチャンでアジア欧州会合（ASEM）首脳会合が開催されます。こうした機会をとらえて、ラオスとその発展に弾みをつけることを期待しています。

（国際学研究科 国際学研究専攻 第 1 期修了生）

（2011 年 11 月 24 日原稿受理）

**海外留学今昔 04** 第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。今回は、チェコに留学経験のある第 11 期生 OG・**間山理美**さんと同じくパラツキー大学に留学していた学部生の**木内美希**さんとペルー留学の**小林由佳**さんをお願いしました。

## 「留学生でなくなる留学、チェコ、パツキー大学での1年間」

間山 理美

面白そう、の相談が、面白かった、の現実に。チェコ留学ってなんだろう。相談の気持ちで向かった石浜先生の研究室。入るときは1人、出るときは3人に。パツキー大学からの留学生2人と研究室を後にし、斜め前の学習室へ。「いつから始めようか」、スケジュール帳に第一回目のチェコ語レッスンの予定を書き込んだところで、相談が終わりました。

留学前の石浜先生の言葉、「ゲーム感覚で楽しんでください」。留学前から始まっていたチェコゲーム。ゲーム1、「私のビザはどこだ」。届かないビザ、毎日期待するも来る気配すら薄れた9月半ば、ビザを持たずに出発することに。そんなゲームが動いたのは留学先オロモウツ。外国人警察ビザ担当者、印紙を持たずに来た私に笑顔で一言、「あなたも印紙を買って来て」。出直すことにはなりましたが、チェコから日本への飛行機に乗ることなく、外国人警察署から郵便局のトラムの往復で、長期滞在が認められたのでした。プラハでなくオロモウツだから起こった奇跡だよ。チェコゲームはいつもこの調子でした。

到着後すぐに始まった授業、まずはチェコ語。久しぶりに味わった、ちんぷんかんぷん。方言のようにチェコ語を操るポーランドやセルビアの留学生、「理美のチェコ語はかわいいね」、うまく話せない私のチェコ語を聞いては楽しんでいました。放課後、留学生と関わる時間は刺激いっぱい。お酒片手の時間が楽しいのは当然ですが、旅先での会話が最も印象的でした。留学生在活が始まって間もない頃、仲間15人ほどで訪れたポーランド。アウシュビッツ強制収容所を各国の友人と歩き、夜はそれぞれの思いを交わしながらの夕食、もちろん片手にはビール。世界中の学生とチェコで出会い、チェコを囲む国々を旅する。チェコがヨーロッパの中心であることを実感する時間でもありました。

年末を境に一気に増えた日本語学科の学生との時間。同時に迎えたイベント「日本の春」。日本語学科主催の日本を伝え、味わうイベントです。そのひとつ「日本の歌」を手伝うことに。このイベントの後から、留学生でなくなる留学が始まりました。たくさんの人の協力が集い、当日は素晴らしい空間に。打ち上げの席でのビール、泡と一緒に味わえたのは最高の達成感でした。

春からは、チェコの中に入り込んだ生活が日常となりました。イベント後も友人との音楽は続き、公園で気の済むまで歌いビールを飲みに行く毎日。帰国2週間前に増えた音楽仲間。もっと音楽をしたいね、と、作った思い残し。また、日本語の授業に参加しているうちに仲良くなった友人と、互いの言語を教え合うように。友人が積極的に行っていた地元高校での日本文化の講義にも参加するようになり、姉妹気分に。何度も訪れた彼女の故郷、いつも娘のように温かく迎え入れてくれた家族には感謝の気持ちでいっぱいです。帰国前にまた来ます、と言って行けなかった、思い残し。

2008年8月、もっといたいという思いと大して身に付かなかったチェコ語をお土産に帰国。

2010年1月、卒論面接を前倒ししてもらいチェコへ。

2010年12月、社会人になり初めてのチェコ。

2011年12月、チェコへ。留学生仲間から突然の報告もあり、ドイツでの結婚式参加も。

「どうしてチェコなの？」留学前、留学中、留学後、何度も聞かれ、何度も考え、何度も答えた、「なんでだろう」。明確な目標なく、チェコのイメージもあまりなく、引き込まれるままに行った留学。そうであったからこそ、チェコで起きたさまざまな出来事を素直に全身で受け入れることができたのではないかと思います。

4年前に始まったチェコゲーム、一向に見えない終わり。行く度に増える友人。留学中に、留学でなくなることに、それがチェコ留学の目標だったのかもしれない。「チェコに留学してほんとはよかったなあ」嬉しいことの後に必ずついてくる呪文です。ゲーム感覚でこの冬もチェコを楽しんで来ようと思います。

(国際学部 国際文化学科 2010年3月卒業生)

(2011年12月2日原稿受理)

### 「東日本大震災によせて」

木内 美希

この度の東日本大地震において亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

チェコでの留学生活6ヶ月目を迎えた3月11日、私はインターネットのニュースで震災のことを知りました。津波が町を襲い、火の海と化した被災地の惨状。時間が経つにつれ報道される被害の大きさに言葉を失い、震災発生から一週間ほど私は何も手につかない状態でした。一週間、二週間が過ぎても相変わらず悲しみを増すニュース。しかしそれとは裏腹に、その間も復興への道を突き進む日本人の姿も報道されていました。私はその姿を観て、逆に被災者の皆様から勇気をもらい、この大震災を決して対岸の火事と思わず、同じ日本人として何か協力できないかと思い、自分がチェコにいて出来る事として募金活動を行うことにしました。

募金活動といっても言葉がうまく通じない国で何をどうしていいのか分からず数日間、悶々とした日々を送りましたが、そんなとき手を差し伸べてくれたのが、パラツキー大学の日本語学科の渡辺先生をはじめ、卒業生や在学学生でした。皆さんと協力し公共施設で行われる劇や講演会の前後で募金活動を行った結果、6月までに約30数万円の震災義援金を集めることが出来ました。

地震が発生した日、私はチェコに居ることを悔やみ、家族や友人が大変な思いをしている中、自分に対し何も出来ない虚しさが込み上げてきました。しかし、募金活動を通してたとえ自分が日本にいらなくても考え行動することで出来ることは沢山あり、何も出来ないのではなく、何もしようと思わないことに問題があるのだと学びました。最初の一步を踏み出せば、そこに新たな視点が加わり、大きな協力を生み出せるのです。

東北地方の復興にはまだまだ時間が必要です。一刻も早い復興を祈りつつ、今後とも自分が出来る範囲で支援を続けていきたいと思っています。

最後に、パラツキー大学日本語学科の渡辺先生をはじめとする、先輩、友人。そして募金に協力してくださったチェコの皆様。皆様の優しさ、そして温かさに触れ、国が異なっても人を思いやる気持ちは繋がっているのだと実感できたことに心から感謝しております。ありがとうございました。

(国際学部 国際社会学科 4年在学生)

(2011年11月25日原稿受理)

\* 木内さん提供の画像は、次のアドレスからコミュニティ広場へアクセスして下さい。  
宇都宮大学国際学部同窓会 HP (<http://afis-uu.bbs.fc2.com/>)

### 「ペルーでの3月11日」

小林 由佳

この場を借りて、今回の震災でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。

3月11日の東日本大震災が発生した当時、私は南米のペルー共和国に留学中でした。東日本大震災はペルーの報道機関でも大きく取り上げられており、テレビでは津波の映像や公共交通機関がすべて止まり、帰宅難民がタクシーを理路整然と並んで待っている映像などが放映されていました。そのような悲惨な状況を見て、私はとてもショックを受けたと同時に、自国のことなのに他人事のように感じてしまう自分、日本の家族や友人の安否を確認できず心配が募るばかりで何もできない自分がとても歯がゆかったのを覚えています。

ペルーの大学や語学学校の友人、近所に住んでいる人々などからは、お見舞いや励ましの言葉を多くもらい、友人からの「とても悲惨な状況だけど、日本なら大丈夫だよ」という言葉に強く励まされました。また言葉だけでなく、千羽鶴を制作したり、日本人の私に被災地の状況はもちろん日本社会全体の動きを尋ねることが多くあり、ペルー人の震災への関心の高さを感じました。地球上で反対側にある他国を心から心配し励ましてくれる人たちがいることをとても嬉しく、そして心強く感じました。何もできないことを悔しく思うのではなく、ペルーでできること、日本に帰国してできることを前向きに考えることができるようになりました。

(国際学部 国際社会学科 4年在学生)

(2011年11月25日原稿受理)

#### NEW

**キャリア指南 03** 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。第3回目には友松研究室OGの**高須花子**さんをお願いしました。

## 「ビジネスマンとしての国際協力」

フェアトレードカンパニー株式会社 高須 花子

私は、2001年3月に国際学部を卒業してから約1年、経営コンサルティングの企業で営業を経験したのち、現在の職場であるフェアトレードカンパニー株式会社に入社しました。先進国といわれる日本に住む人々に対し、貧困・人権・環境問題の解決に結びつく消費やライフスタイルのひとつとして、「フェアトレード」を提案し広める営業活動をしています。

「フェアトレード」とは、途上国に対し、寄付などによる一方的な支援ではなく、現地に根付く自然素材や伝統技術を活かした製品を生産者と共同で開発し、公正な価格の支払いやデザイン・技術研修の支援、継続的な発注を通じて、環境を害さない持続可能な生産を支えていくという、お互いが対等な立場に立ってはじめて成り立つビジネスのことです。

はじめは、「国際協力」と「ビジネス」という言葉がどうしても両立するように思えませんでした。しかし、国際協力の中でも、途上国の人々の、施しに頼らない「誇りある自立」を目指すためには、持続性・成長性のあるビジネスパートナーとしてお互いを信頼し合い、ボランティアの範囲を越えたプロ意識を持って課題に取り組む、という姿勢が大変重要であると感じています。また同時に、初めに勤務した企業で学んだ、多様な社会構造や様々な立場から、多様な考えを持つ人々とのコミュニケーションの複雑さを理解しながら自らの考えを発信し、調整していくことの重要性も感じています。

大学生の頃の私は、「仕事に就くなら、絶対に国際協力の仕事」と固く心に決めて過ごしてきました。一体どうすれば、現在まさに国際協力の現場で仕事をされている方のような仕事に就けるのかを知るため、NGOや国際組織で仕事をしている方のお話を聞きに行ったり、スタディーツアーで途上国に訪れた際には、現地のプロジェクトの様子を学ぶと同時に、主催団体のスタッフの方の経歴を教えていただいたりしました。そしてその結果、ほとんどの方が、国際協力の仕事に携わる前に民間企業での数年間の経験があり、転職という形で国際協力の仕事に就かれていることに驚きました。中には、国際協力とはまったく無縁に思える職種から転職されたケースも多々ありました。

いざ国際協力の現場で必要とされる人材として成長できるか否かにとって大切なのは、経験してきた仕事の種類ではなく、仕事＝使命に対する責任感と、果たすべき仕事に対して効率良く最大限の結果を出すための実行力の有無だと教えていただいたことで、私は大学卒業後、敢えて国際協力とは関係のない、経営コンサルティングの企業に就職しました。そこでは、限られた資源（資金・人材・時間など）を最大限に活用して、結果を出すための戦略を考える、といった経営戦略を考える業務が主でした。短い期間でしたが、それに携わることができたお陰で、現在の仕事も効率を意識しながら取り組むことができるようになったと思います。

国際協力の仕事は、緊急性を伴うことも多々あります。一方で、十分な資金や資源が常に潤沢にあるとは限りません。そういった状況でも、常に求められる結果を出せるような企画・実行力を身につけた人こそ、即戦力として望まれるのが国際協力分野の実情だと思

います。

まずはどんな職種であっても、熱意をもって取り組めば、携わりたいと考える仕事に必ずプラスになる知識や経験を身につけることができると思います。常に目標を見失わず、夢の実現に向けて頑張ってください。

(2011年12月6日原稿受理)

(国際学部 国際社会学科 2001年3月卒業生)

**フォーラム** 2011年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。)今回は博士後期課程在籍中の柄木田研究室、**金裕美**さんと吉田研究室OGの**平岡慶子**さんをお願いしました。

### 「宇都宮大学入学後の研究を振り返って」

金裕美

はじめまして、宇都宮大学大学院博士後期課程に在学中の金裕美です。私は、2003年から2005年まで青年海外協力隊の日本語教師隊員として中国湖南省の吉首大学で日本語を教えました。帰国後、中国に関係した研究史がしたいと思い、宇都宮大学の修士課程(当時)に入学しました。修士課程では柄木田康之教授の指導の下、中国南西少数民族の研究を行いました。

私が調査地として選んだのは、広西チワン族自治区三江トン族自治県です。三江トン族自治県はトン族が人口の約六割を占める少数民族居住地域です。また、この地域には、昔ながらの木造建築と田園風景が広がり、トン族建築として中国国内でも有名な程陽橋と呼ばれる屋根のついた橋があります。協力隊時代には中国各地を旅行したのですが、この地域の印象は特に強いものでした。というのも、協力隊時代に刺繍に興味を持ち始めた私は、この村で一週間刺繍を作る女性に弟子入りをしたからです。その当時師匠として刺繍を教えてくれた女性が、現在の私のホストマザーでありインフォーマントです。

修士論文を執筆中に数回に分けてフィールドワークを行ったのですが、博士後期課程ではもっと長期に連続的なフィールドをしたいと考えました。そこで、中国政府の奨学金に応募し、二年間の奨学金と中国留学の機会を得ました。当初留学先として、フィールドワークの村に近い大学を希望していたのですが、結局広東省の中山大学への留学となりました。はじめの半年は中国人の博士課程の学生たちと授業に参加し、その後大学から紹介状を得るという形でフィールドワークへ出ました。

フィールドワークではトン族の女性の手工芸品に焦点を絞り、日中は女性と行動をともにし、夕ご飯後は部屋で収集したデータの整理とフィールド日記をつけるという生活をおくりました。女性たちと慣れればなれるほど、日常の手伝いを頼まれることが多くなりました。日常的には子供を預けられ、旧正月のお祝い前には、何十羽の鴨と鶏をおとし、羽を抜いて解体する手伝いをしました。女性たちとの信頼関係形成のため、これらも研究の

傍ら行いました。

宇都宮大学に入学した後を振り返ってみると、忙しいながらも充実したフィールドワークと大学院生活をおくってきました。留学中に得た中山大学の博士課程の友人たち、そしてフィールドで色々なことをともに経験したトン族の女性たち。彼らは私にさまざまな事を教え、現在までの道のりを導いてくれたと思います。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第3期修了生)

(2011年10月30日原稿受理)

### 「大学院で学んだことーその利点と課題」

平岡 慶子

1月に修士論文を書き上げて10ヶ月経ちました。時間が経過するにつれて、大学院で学んだ経験の貴重さ、有用さが少しずつわかってきたように思います。意外なことに、最も役に立っているのは研究の中心であった修論のテーマにかかわることがらではなく、論文の構成を決める前の漠然とした状況の中で、様々な方向の先行研究を模索した経験でした。

私は長年日本語教師をしており、解決すべき様々な問題に対してその都度「調べる」「考える」等の努力は精一杯してきたつもりでしたが、その分野の先行研究を探して読むことから対応策を考えはじめことはありませんでした。しかし、必死に文献を探し、遮二無二読んだ大学院時代を経た今では、その問題点に関連のありそうな論文を探して読むことから対応策を考え始めることが多くなりました。

現実の問題点というものは整然とした形で出てくるものが少なく、様々な要素が複雑に絡まり合った結果であることが多いと思います。そんな中、自分の受けた印象や思い込み、熱意などだけで対応していこうとすると視点が偏り、せつかくの努力も空回りすることになります。しかし、先行研究に目を通させてもらおうと、異なる視点や発想と研究意図、様々な角度からの取り組みの存在を知ることができ、より注意深く、自信を持って対応できるようになります。以前の「ひたすら頑張る」自分は「盲蛇に怖じず」の典型だったかもしれないと反省することが多いこの頃です。

修士論文を提出した時には、がんばってかなりの数の先行研究の文献を読んだのに、ほんの一部しか引用できなかつたことを口惜しく思ったものです。しかし、今ではその経験があったからこそ論文の検索方法や、ざっと内容を知る・必要な箇所を探して読む・論点の構成に注目して読む等、目的に合わせた様々な論文の読み方の基礎が身について、大学院や指導していただける先生方から離れた今でもなんとか自分なりに活用できるようになったのだと思っています。

私にとって修士論文を書くということは雑然とした現象を分析し、取捨選択して一つの筋道を見つけていく取り組みだったように思います。それはそれで本当に良い経験でしたが、そこに至るまでに様々苦勞したプロセスが、後々、このように自分の可能性を広げてくれる貴重な体験になったことは予想外の収穫でした。この先私自身が研究者になること

はないと思いますが、今後も偏らない視点に立って実践的であり続けたいと願っています。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第3期修了生)

(2011年11月16日原稿受理)

## New

### EU 支部だより

第38号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行することになりました。今回の第3号の内容は、1 イタリア ワインで日本支援 2 EU 支部だより -イタリア人の休暇観- です。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

### ●編集者のひとりごと

今号も前号に続き大頁数になりました。多くの執筆者のお蔭です。改めて、投稿ありがとうございました。今回の編集方針は、当初に考えていた「海外便り」と「海外留学今昔」はチェコ編ということで企画をしていましたが、チェコ在住の當真里絵さん(国際文化学科・第3期生)と連絡が途絶えてしまい小企画となりました。東欧の海外事情を紹介していただきかったのですが、大変残念です。どなたか連絡先をご存じの方は、編集者までお知らせいただければ幸いです。

次号は3.11を振り返る意味を込めて、「災害を考える」編集方針にしたいと考えています。もし、投稿の意思がある方々は遠慮なくご連絡いただければありがたいです。

今回は「海外留学今昔」に投稿された木内美希さんから、画像が提供されています。当初は知求会のMLのアルバムに掲載しましたが、ID/パスワードのセキュリティを考慮して、国際学部同窓会 HP(<http://afis.jp>)のコミュニティ広場に掲載しました。ぜひ、多くの同窓生がアクセスされて、HPの存在を同窓生に教えあって下さい。よろしく願い致します。

さて、知求会ニュースも、無事10年目を配信することができました。これまでの原稿執筆者の皆様、本当にありがとうございます。Season's Greetings! 皆様、よいお年をお迎え下さい。

---

編集後記：2010年4月26日から 知求会ニュースのバックナンバーは 国際学部同窓会 HP (<http://www.afis.jp>) で見られるようになりました。

同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 [chikyukai@yahoogroups.jp](mailto:chikyukai@yahoogroups.jp)